



世田谷パブリックシアター
SETAGAYA PUBLIC THEATRE

2017/6/13

夏休み、少年2人は車で旅に出る。
思春期特有の疾走感と切なさがつまった、ひと夏の冒険譚。

世界中で愛されている児童文学をもとにした
ドイツで話題沸騰のロードムービー風舞台、本邦初演！

チック



Tschick

原作= ヴォルフガング・ヘルンドルフ 上演台本= ロベルト・コアル
翻訳・演出= 小山ゆうな



出演=

柄本時生 篠山輝信 土井ケイト あめくみちこ 大鷹明良

2017年8月13日(日)―8月27日(日) 会場 シアターラム
チケット一般発売開始 2017年6月4日(日)

主催= 公益財団法人せたがや文化財団 企画制作= 世田谷パブリックシアター 後援= 世田谷区

【お問い合わせ】

世田谷パブリックシアター 営業: 竹村 竜

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂 4-1-1 TEL 03-5432-1525 FAX 03-5432-1559

<http://setagaya-pt.jp/> r-takemura@setagaya-ac.net(竹村)

チック



夏休み、少年2人は車で旅に出る。
思春期特有の疾走感と切なさがつまった、ひと夏の冒険譚。

—— 小さい頃から、父さんに世の中は最悪で、人間はみんな最悪だって聞かされていた。
もしかしたら、それもあっているかもしれない、99%の人間が最悪なのかもしれない。

でも、不思議なことに、チックと俺は旅で最悪じゃない1%の人に出会った ——

1. 概要

世田谷パブリックシアター20周年の夏は、世界26カ国で愛されている児童文学をもとにしたドイツで話題沸騰のロードムービー風舞台を本邦初演！

ミリオンセラーを誇るドイツ児童文学賞受賞小説「Tschick」を舞台化した『チック』は、14歳の冴えない少年マイクとロシア移民の転校生チックの2人の少年が、夏休みに盗んだ車で旅をするというロード・ムービーさながらの物語です。

2011年にドイツで初演、翌シーズンではドイツ国内で最も上演された舞台作品となり、現在でもなお上演の度にチケット完売が続くなど、大成功を収めています。また16年には同原作の映画版がドイツにて封切られ、いよいよ9月には日本で公開されます。

ドイツで火が付き、今や世界を巻き込む勢いの少年2人の物語が、今年8月、シアターラムにて本邦初演を果たします。

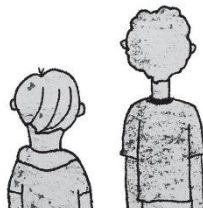
ドイツ出身、期待の“ネクスト・ジェネレーション” 小山ゆうなが翻訳・演出を手掛け、14歳の少年を柄本時生、篠山輝信が演じる！

開場20周年を迎えた世田谷パブリックシアターは、舞台芸術界の来るべき未来を担う新しい才能や、レパートリーとして長く上演しうる作品の発掘・紹介にますます力を入れていく所存です。20周年の夏に皆様にご紹介するのは、ドイツ・ハンブルグ出身の若手・小山ゆうな。自らの手で翻訳も行い、長年あためてきた本作の念願の日本初演を手掛けます。

たった数日間の旅で、それまでの価値観が一変するような大きな経験をする2人の14歳——不敵なたずまいのアジア系ロシア移民チックを柄本時生が、クラスでは目立たないタイプだが魅力を秘めたドイツの少年マイクを篠山輝信が演じます。

観客は少年2人が運転するオンボロ車とともに乗り込み、彼らとともにひと夏の旅に出かける気持ちになることでしょう。子どもはワクワクし、そして大人は14歳の自分と大人の自分の両方の感情が入り交じり、最後は夏にピッタリの爽やかな気持ちになっていただけるような舞台を目指します。誰もが持っている感覚や思い出を、『チック』という物語を通して舞台上にたちのぼさせます。

少年2人の思い出の夏には、狂気と切なさがつまってる……



2. ストーリー

— チックがいなかったら全て、決してこの夏に体験できなかった。
めっちゃめっちゃいい夏で、最高の夏だったと思った —

マイク(篠山輝信)は 14 歳、ベルリンのギムナジウムに通う8年生。アルコール依存症の母(あめくみちこ)と、その母と喧嘩ばかりで家庭を顧みない父(大鷹明良)、そして気になる女の子だけでなく誰からも見向きもされない、あだ名もつけられない退屈な学校生活……“出口なし”の日常に嫌気がさしている。

ある日そんな生活に大きな風穴をあける、転校生チック(柄本時生)がやってくる。彼はロシアからの移民らしく、風変わりで得体のしれない雰囲気をかもしだしている。夏休みが始まり、いつにも増して最悪な気分のマイクの元に、チックは突然車を乗りつけてきた。

— どっか連れて行こうか？ 乗れよ —

チックいわく“借りた”というオンボロなラーダ・ニーヴァ(ロシアの SUV)に乗り込み、チックのおじいさんが住んでいるというワラキア(ルーマニアの地方、またはドイツ語で「僻地」という意味)を目指し、2人だけの旅が始まる。

見知らぬ大家族の家で味わう見たことも聞いたこともないけど“めっちゃめっちゃ美味しい”料理、ゴミ山で出会う格好は汚いけど利発な少女イザ(土井ケイト)、いきなり銃撃してきたあとに昔話をするフリッケじいさん……旅先で出会う、一癖も二癖もある人たち。

チックとマイクは、旅の中で、これまで見えていた世界とは違う新しい景色と出会っていく。

3. 『Tschick』 児童小説から舞台、映画へ

原作は 2013 年に早世した才能あふれるドイツの作家ヴォルフガング・ヘルンドルフにより書かれた、児童文学「Tschick」です。10 年、ヘルンドルフが自身の病気を知った直後に執筆・出版された本作は、一躍旋風を巻き起こし、ドイツ国内で一年以上にわたりベストセラーを記録、220 万部以上を売り上げました。ドイツ児童文学賞などを受賞し、日本でも 13 年に「14 歳、ぼくらの疾走：マイクとチック」(小峰書店)という邦題で出版されています。現在は 26 カ国で翻訳され、まさに世界中で愛されている小説です。

舞台版も大成功を収めています。11 年末にドイツ座とドレスデン州立劇場にてほぼ同時期に初演(*)、瞬く間に評判を呼び、12/13 年のシーズンでは 29 のプロダクションにより上演され、述べ 764 回の公演数を記録。ゲーテ、シラー、シェイクスピア作品を上回りそのシーズンの最多上演作品となりました。さらに 13/14 年は計 954 回、14/15 年は計 1,156 回と、シーズンごとの公演数は驚異的な伸びを見せました。現在でも、ドイツ座を始め様々な劇場で上演されており、チケットの入手が難しい評判作として知られています。

*2011/11/19 ドレスデン州立劇場(演出:Jan Gehle)、2011/12/3 ドイツ座(演出:Alexander Riemenschneider)にて初演

また、原作の映画版「Tschick」(原題/監督:ファティ・アキン)は昨年ドイツで封切られた後、世界各国で公開され、いよいよ日本でも「50 年後のボクたちは」という邦題で 9 月 16 日(土)よりヒューマントラストシネマ有楽町、新宿シネマカリテほかにて全国順次公開されます。

ドイツでは刑事罰にあたらない最後の年齢である“14 歳”特有の思春期の悩み、複雑な家庭環境、そして世界が抱える移民問題をも映し出す、普遍的でありながらも同時代作品ならではの刺激に満ちています。



©2016 Lago Film GmbH. Studiocanal Film GmbH

『Tschick』

【小説】 2010 年、ドイツ出版 … 2013 年、日本版出版

*ドイツ児童文学賞、クレメンス・ブレンターノ賞、ハンス・ファラダ賞を受賞

【舞台】 2011 年、ドイツ初演 … 2017 年8月、日本版シアターラムにて初演(主催・企画制作:世田谷パブリックシアター)

【映画】 2016 年、ドイツ公開 … 2017 年9月、日本公開

4. 翻訳・演出／小山ゆうな

『チック』上演に向けて — 小山ゆうな(翻訳・演出)

2010年に脳腫瘍が見付き、2013年に48歳で自らの命を絶ったヘルンドルフは、病気がわかった直後に『チック』を書いた。

その6年前に、短編として書いた作品を長編にのばしたものののだが、強く死を意識したヘルンドルフは何故この14歳の少年二人の物語を書いたのか。

14歳という良い事も悪い事もビビットに感じられ、様々な事が凝縮される時期の少年達を通して、社会の一般常識やルールがいかにも、その枠から外れてしまった者にとって残酷か、本当に大切な事を見失わせる可能性を秘めているかを描いた事が多くの人々の心をとらえ、国をこえ、時代をこえ、本だけで26カ国語に訳され、演劇もドイツではやられていない公共劇場は無い程の広がりを見せている。

チックは、ロシアからの移民だ。ロシア帝国時代に耕地開拓の人員確保の為にドイツから誘致されたドイツ人の子孫で、その多くがスターリン時代には中央アジアに追放され、戦後はドイツに帰国したが、二世、三世はドイツ語が出来ず、ドイツでも厳しい環境におかれた。チックはそんなドイツパスポートを持つドイツ系ロシア人で、社会と政治的歴史に翻弄された内の一人なのだ。とはいえ、14歳のチックはその事を悲観する事なく、ただ生まれつきそうだった現実として受け入れている。しかし彼に与えられた環境が彼を孤立させている事は間違いなく、ドイツには多くのこのような厳しい環境に身を置く移民がいる。

ロシアとドイツの歴史については、別の登場人物である、ナチス時代の元軍人フリッケによっても語られており、大きく変化をしていくドイツの政治的スタンスが多くの人の人生を翻弄し決定付けていく現実を浮かび上がらせている。

本作品にはこのようなドイツの重い歴史を背景としたエピソードもあるが、重い歴史が中心的テーマにはならず、あくまで当たり前の事として存在し、きっと誰もが共感出来るエピソードを積み重ね、その中で人々が生きている姿を描き、その事が他にありそうでないこの作品の魅力となり、様々な賞を受賞し高い評価を受ける作品とさせている。ドイツの全国紙フランクフルターアルゲマイン紙にも、作中の「50年後どうなってるんだろう」という台詞にかけた洒落たレビューとして「50年後も読まれる作品」と載った。

戯曲版を書いたロベルト・コアルは、ルネ・マグリットのユーモアと哲学に満ちた絵を描く画家でもあるヘルンドルフが既成概念にとらわれない自由な表現を好んだのと同様に、原作の言葉を崩さずに半分以上一人称で語られる作り手に表現を委ねる形で戯曲化している。今回、この委ねられている部分を、どのような想像力と遊び心で表現し、正に今の日本で上演する『チック』にしていく事が出来るかが鍵となる。

14歳のチックが古いロシア車ラーダ・ニーヴァを盗んで(本人いわく借りて)マイクを誘いに来る。そして二人は旅に出る。

複雑に絡み合い、真実や大切な事を見失いそうになる現代社会で、どう生きるのか、死を意識したヘルンドルフが、正に疾走する少年達に重ねて、生きる事について全エネルギーを注いで紡ぎだした美しい言葉一つ一つにヒントが見いだされ、日本のお客様の心をとらえるものとなる事を祈っている。

小山ゆうなについて

本邦初演『チック』の翻訳・演出はドイツ出身の若手・小山ゆうな。世田谷パブリックシアター初登場、また公共劇場の企画制作作品への登場が初めてとなりますが、作品上演の度に評価を高める演劇界の“ネクスト・ジェネレーション”の一人です。

演劇ユニット「雷ストレンジャーズ」を主宰し、テレンス・ラティガン、フリードリヒ・シラー、ヘンリック・イブセンなどの翻訳作品の演出で評価を得ています。作品の背景を大切にしながらも、現代社会を浮き彫りにする演出は高く評価され、15年に上演したイブセン作『フォルケフィエンデ 人民の敵』は演劇誌「テアトロ」に今月のベストスリーとして紹介され、また16年には第3回東京ミドルシアター・フェスティバル「国際演劇祭 イブセンの現在」に日本の最先端のイブセン作品として選出され、再演を果たしています。

『チック』演出について

14歳の少年が主人公の児童文学を原作とする『チック』ですが、決して子どもだけに向けた作品ではありません。

誰もの琴線に触れるストーリーとともに、本国ドイツでのロングランには、14歳の少年を20代、30代の俳優が演じるという舞台ならではの演出が作品の魅力を高めています。14歳という年齢は特別な意味を持っています。それは、もっとも多感で様々に葛藤する年頃であり、またドイツでは刑事罰が適用されるちょうど境目の年齢だということです。大人と子どもの境界にある思春期を、あえて大人の俳優が演じる演出により、実年齢の俳優では表現できない複雑さとユーモアを付与し、大きな共感をもたらしています。

日本初演の今回も、少年2人と彼らに関わる謎の少女などの子どもたちをあえて“大人”の俳優で上演します。懐かしくも胸が痛く、熱くなるような疾走感に満ち溢れた思い出の10代を、そこを通り過ぎてきた大人だからこそその感性で表現することで、作品をより魅力的に構築していきます。

また少年たちが旅先で出会う複数の大人は、少年マイクの父と母を演じる俳優があえて演じ分けず。“大人”のネガティブなイメージが反映されている両親たちと、見知らぬ少年に手を差し伸べる風変わりだけど親切な人たち、というダブルミーニングのような意味合いをもたせ、より舞台ならではの演出を駆使して物語を表現していきます。

少年2人が乗り込むオンボロなラーダ・ニーヴァに観客も乗り込み、2人と一緒に旅に出て、そして彼らの目を通してひと夏の旅を体験していくような、子供が楽しめる、そして大人だからこそ楽しめる舞台を目指します。

5. キャスト

風変りで周囲に染まらない14歳の少年チックをえもとときお柄本時生が演じます。映画やテレビドラマでの活躍だけでなく、故・松本雄吉や森新太郎など、さまざまな演出家からの信頼を得る演技力と、唯一無二の存在感を持つ柄本が、独特な雰囲気を持ちマイクの人生を変えていくチックをどのように演じるのか、期待が高まります。

チックとともに旅に出るマイクをしのやまあきのぶ篠山輝信が演じます。現在、NHK「あさイチ」などテレビ番組での活躍目覚ましい篠山は、特に舞台への出演を熱望していました。小山は「マイクは自分を退屈だと表現するが、本当は人を引き付ける魅力を持っている。篠山にも同じ魅力を感じている」と期待を寄せています。篠山とマイクのどこか放っておけない魅力的な一面が重なり、観客の心をつかんでいくことでしょう。

チックとマイクが旅先で出会う少女イザ、そしてクラスのマドンナ・タチアーナをどい土井ケイトが演じます。故・蜷川幸雄が立ち上げた「さいたまネクストシアター」の旗揚げメンバーの中でも光る演技力で注目され、今年5月の藤田俊太郎演出の二人芝居『ダニーと紺碧の海』ではヒロインに抜擢されています。今後の活躍が期待される土井が、汚くて綺麗な2人の女の子をフレッシュな演技で表現します。

マイクの母親役を**あめくみちこ**が演じます。アルコール依存症で過激な言動の多い女性ですが、だからこそ思春期のマイクにとって、そしてこの物語にとって重要な意味を持つ存在であり、もう一人のキーパーソンであるといえます。“最低”だがどうしても憎めない存在の母親役で、あめくの求心力がいかに発揮されます。あめくと大鷹はそのほかにも少年たちを取り巻く様々な大人を演じます。

おおたかあきら

大鷹明良は、マイクにとって“大人”の代名詞でもある父親役やワーゲンバッハ先生、旅先で出会うフリッケじいさんなど物語の要となる複数の役を演じます。特に、旅の途中で登場するフリッケじいさんは、ドイツの戦争と移民の歴史を語る存在です。彼が語る内容は、少年たちのルーツ、ひいては現在社会が直面する移民問題のルーツにも関わり、物語にさらなる深みを与えています。そのほか旅先で出会う少年まで、変幻自在の大鷹の演技力により物語が鮮やかに展開していきます。

6. プロフィール

原作：ヴォルフガング・ヘルンドルフ Wolfgang HERRNDORF

1965年、ハンブルク生まれ。ニュルンベルクの芸術アカデミーで絵画を学び、イラストレーターとして風刺雑誌「Titanic」などに寄稿。2002年に「In Pluschgewittern」で作家デビューし、10年に発表された本作「Tschick」は、ドイツ児童文学賞、クレメンス・ブレンターノ賞、ハンス・ファラダ賞を受賞。11年の「Sand」（邦題「砂」論争創社）はライプツィヒ・ブックフェア賞を受賞し、ドイツ書籍賞のショートリスト入りも果たした。10年に脳腫瘍が見つかって以来、闘病しながら執筆活動が続けていたが、13年、自ら命を絶つ。まだ48歳の若さだった。

上演台本：ロベルト・コアル Robert KOALL

ベルリン自由大学で法律、文学、歴史、哲学を学ぶ。1995年以降、ドラマトゥルク等でキャリアを積んだ後、2009年から16年までドレスデン州立劇場のディレクター、16年夏からデュッセルドルフ シャウシュピールハウスでドラマトゥルクチーフと副ディレクターを務める。コルネーリア・フンケの「インクハート 3部作」（『魔法の声』『魔法の文字』『魔法の言葉』）、また作者のヘルンドルフと親交があったことから実現した『チック』の上演台本で世に名を知られるようになる。

翻訳・演出：小山ゆうな（こやま ゆうな）

ドイツ ハンブルグ生まれ。早稲田大学第一文学部演劇専修卒業。劇団 NLT 演出部を経てフリーに。アーティストユニット「雷ストレンジャーズ」を主宰する。最近の演出作にシュニッツラー『緑のオウム亭-1幕のグロテスク劇-』（17年）、イプセン『フォルケフィエンデ 人民の敵』（15年初演、「テアトロ」渡辺保氏の“今月のベストスリー”に選ばれ、16年『国際演劇祭-イプセンの現在』に招聘され再演）、ラティガン『ブラウニングバージョン』（14年）、劇団銅鑼公演・別役実『はるなつあきふゆ』（15年）などがある。

柄本 時生（えもと ときお）

1989年生まれ、東京都出身。2003年、映画 JamFilm S 「すべり台」（主演/2005年公開）のオーディションに合格し、デビュー。以降、数々の映画やTVドラマ、舞台上で独特の存在感を放ち活躍の場を広げている。近年の主な出演作に舞台『レミング』（演出：松本雄吉）、『インシユマン等のピリー』（演出：森新太郎）、『ラヴ・レターズ』（演出：青井陽治）、『ダニー・ボーイズ』（演出：元生茂樹）、『ゴドーを待ちながら』（演出：柄本明）、『わらいのまち』（作・演出：宅間孝行）など。映画「超高速！参勤交代リターンズ」（元木克英監督）、「青銅の基督」（秋原北胤監督）、「聖の青春」（森善隆監督）など。TV「初恋芸人」（BSプレミアム）、「侠飯～おとこめし」（TX）、「増山超能力師事務所」（ytv）など。

本年、映画「花筐」（大林宣彦監督）、「彼女の人生は間違いじゃない」（廣木隆一監督）、「増山超能力師事務所～激情版は恋の味～」（久万真路監督）の公開、舞台『関数ドミノ』（演出：寺十吾）の出演を控えている。



篠山 輝信（しのやま あきのぶ）

1983年東京都生まれ。玉川大学芸術学部卒業。2006年、舞台『ANGEL GATE～春の予感』で俳優としてデビュー。以降、ドラマや映画、CM出演のみならず、テレビ番組のパーソナリティーやタレントとしても幅広く活動している。明るくさわやかな笑顔と誠実な人柄で、NHKの情報番組「あさいチ」のリポーターとしても高い人気を獲得し、Eテレの英語番組「しごとの基礎英語」ではビジネスでも使えるリアルな英語をもとに台本なしのミニドラマに挑戦するなど、さまざまなテレビ番組で活躍中。

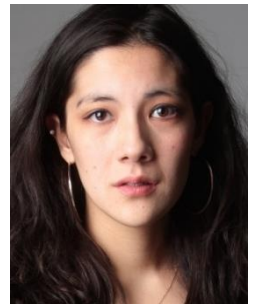
主な出演作品は、＜舞台＞『寝盗られ宗介』、『飛龍伝 2010 ラストプリンセス』、『女信長』、『abbey アビイ』、＜ドラマ＞「乙女のパンチ」、「忠臣蔵 瑤泉院の陰謀」、「ダンドリ Dance★Drill」、＜テレビ＞NHK「あさいチ」、「どーも、NHK」、「しごとの基礎英語」、NTV「スクール革命」、TX「主治医が見つかる診療所」、BS日テレ「おいでよ！森クミの部屋」ほか。



土井 ケイト（どい けいと）

1989年1月17日生まれ、28歳。アメリカ合衆国出身。19歳のときに故・蜷川幸雄主宰さいたまネクストシアター旗揚げメンバーに約30倍の競争率の中合格。2009年さいたまネクストシアター旗揚げ公演『真田風雲録』にて初舞台を踏む。

主な出演舞台に、『美しきものの伝説』（2010年／第18回読売演劇大賞優秀作品賞受賞）、『ハムレット』（2012年／第20回読売演劇大賞優秀作品賞受賞）、『ヘンリー四世』（2013年）、『海辺のカフカ』（2014年・再演）、『皆既食』（2014年）、『海辺のカフカ』ワールドツアー（2015年／ロンドン・ニューヨーク・シンガポール・ソウル・東京にて上演）など、演出は蜷川幸雄氏。蜷川作品の中でも光る演技力で注目され、着実な経験を重ねた結果、2017年は鬼オマイケル・メイヤー氏が演出する舞台『お気に召すまま』に出演。5月には、松岡昌宏との二人芝居である『ダニーと紺碧の海』（演出：藤井俊太郎）ではヒロインに抜擢されるなど、圧倒的な存在感を放つ、期待の実力派若手女優である。



あめく みちこ

沖縄県出身。1983年に「劇団東京ヴォードヴィルショー」に入団。以降、劇団を中心に外部の舞台作品、TVドラマや映画など幅広く活躍している。2010年には同世代の女優と共に「劇団姦し」を結成。赤堀雅秋氏を作・演出に迎え、『夕立』（10）、『歓喜の歌』（13）などを上演。近年の主な舞台出演作は、『かもめ』（16）、『狸御殿』（16）、『焼肉ドラゴン』（16）、『三文オペラ』（14）など。主な劇団公演の舞台では、『その場しのぎの男たち』、『パパのデモクラシー』、『アパッチ砦の攻防』、『田茂神家の一族』ほか。ドラマでは「再捜査刑事・片岡悠介 シリーズ」（15～・EX）、「温泉殺人事件シリーズ」（16～・TBS）、「逃げる女」（16・NHK）、「カーネーション」（12）など。2013年には『負傷者 16人-SIXTEEN WOUNDED』（演出：宮田慶子）と劇団公演『竜馬の妻とその夫と愛人』（作：三谷幸喜 演出：山田和也）で第20回読売演劇大賞優秀女優賞を受賞。5月に神奈川芸術劇場（KAAT）にて『春のめざめ』（演出：白井晃）の舞台公演が控えている。



大鷹 明良（おおたか あきら）

演劇舎蟻螂出身。演出家佐藤信に見出され、92年黒テント公演『荷風のオペラ』などで注目を集める。その後デヴィッド・ルヴォー演出『あはれ彼女は娼婦』（93年）、『チェンジング』（95年）、ガジラ鐘下辰男作・演出『PW』『tatsuya』（99年）、二兎社永井愛作・演出『萩家の三姉妹』（00年）などの作品で着実に、高い評価を得ていく。03年故・井上ひさし作品に初出演、『兄おとうと』『箱根強羅ホテル』『わたしは誰でしょう』『夢の裂け目』『黙阿弥オペラ』、こまつ座&世田谷パブリックシアター『藪原検校』に出演。最近の舞台作品に『炎の人』（11年 演出：栗山民也）、『祈りと怪物』（12年 演出：ケラリーノ・サンドロヴィッチ）、『あかいくらやみ』（13年 演出：長塚圭史）、『東海道四谷怪談』（15年 演出：森新太郎）『大逆走』（15年 演出：赤堀雅秋）、『るつぼ』（16年 演出：ジョナサン・マンビイ）、『春のめざめ』（17年 演出：白井晃）など。テレビ「下町ロケット」（TBS）「伝七捕物帳」（NHK）など。映画「バンクーバーの朝日」（石井裕也監督）、「深夜食堂」（松岡錠司監督）、「闇金ウシジマくん the final」（山口雅俊監督）、「ぼくは明日、昨日のきみとデートする」（三木孝浩監督）、「アウトレージ 最終章」（北野武監督）などがある。



7. 公演概要

『チック』

【原作】ヴォルフガング・ヘルンドルフ 【上演台本】ロベルト・コアル

【翻訳・演出】小山ゆうな

【美術】乗峯雅寛 【照明】成瀬一裕 【音響】尾崎弘征 【衣裳】樋口藍 【ヘアメイク】馮啓孝

【演出助手】五戸真理枝 【舞台監督】高橋良直 【プロダクションマネージャー】福田純平 【技術監督】熊谷明人

【出演】

柄本時生 篠山輝信 土井ケイト あめくみちこ 大鷹明良

【日程】2017年8月13日(日)―8月27日(日) 【会場】シアタートラム

	8/13(日)	14(月)	15(火)	16(水)	17(木)	18(金)	19(土)
昼	16:00	休演日		14:00	14:00		13:00
夜			19:00			19:00	18:00

	20(日)	21(月)	22(火)	23(水)	24(木)	25(金)	26(土)
昼	13:00 ■	休演日		14:00	14:00		13:00
夜			19:00	19:00		19:00	18:00

	27(日)
昼	13:00
夜	

■ = 視覚障害者のための舞台説明会あり

【チケット一般発売開始】2017年6月4日(日)

【チケット料金】

一般 6,500円 友達割(高校生以下2~3名)1名につき3,000円 親子ペア 8,800円

高校生以下・U24は一般料金の半額 ほかに各種割引あり ※託児サービス、車椅子スペース取扱いあり

【チケット取扱い】

世田谷パブリックシアターチケットセンター 03-5432-1515 (10~19時)

世田谷パブリックシアターオンラインチケット (PC)<http://setagaya-pt.jp/> (携帯) <http://setagaya-pt.jp/m/>

【お問合せ】世田谷パブリックシアターチケットセンター 03-5432-1515 <http://setagaya-pt.jp/>

【主催】公益財団法人せたがや文化財団 【企画制作】世田谷パブリックシアター 【後援】世田谷区

【協賛】トヨタ自動車株式会社/東邦ホールディングス株式会社/Bloomberg

【協力】ドイツ文化センター/東京急行電鉄株式会社

【兵庫公演】2017年9月5日(火)19:00・6日(水)13:00 兵庫県立芸術文化センター 阪急中ホール